

3-2 東西対立と民族紛争 <基礎編>

世界にはなぜ紛争が絶えないのだろうか？

冷たい戦争

両大戦への反省から国際連合が設立されたにもかかわらず、第二次世界大戦後から1989年まで、国際社会には東西対立（冷戦）【①】の時代が続いた。第二次世界大戦中米ソ両国は協力関係にあったが、戦後もなくソ連の影響を受けた社会主義勢力が東ヨーロッパで拡大するなかで、両国の関係は協力から対立へと変化し、アメリカはソ連の勢力拡大を阻止し封じ込める政策をおこなったのである。資本主義のアメリカ陣営（西側）と社会主義のソ連陣営（東側）は、イデオロギー（物事の考え方）とその勢力圏をめぐる激しく対立し、西側の諸国は北大西洋条約機構（NATO）、東側の諸国はワルシャワ条約機構などを結んで互いに結束し、世界は東西に二分された。またドイツ・朝鮮半島・ベトナムでは、国家が二つに分裂した。

デタントから多極化へ

しかし1962年に発生したキューバ危機【②】をきっかけに、米ソ首脳は平和安定をめざすようになった。（この動きをデタント（緊張緩和）と呼ぶ）。また1960年代から東側陣営の内部では中国とソ連の対立が表面化したり、ド・ゴール大統領時代のフランスが独自性を求めてアメリカ離れを始め、さらにドイツや日本が経済復興してくるようになった。

さらに1950年代の中期から60年代にかけて、新たに植民地支配から独立した諸国は、冷戦下で米ソのどちらにも加わらないことを主張するようになった（これらの諸国を第三世界と呼ぶ）。こうして、世界は多極化の時代を迎えた。

冷戦終結と民族紛争

1985年にソ連でゴルバチョフが実権を握ると、米ソ首脳は1989年、マルタ会談で冷戦の終結を宣言した。同年にベルリンの壁【③】は崩壊し、1990年には東西ドイツが統一され、翌91年にはソ連が解体した。東欧諸国でもそれまでの政権が倒れ、体制が変革される東欧革命が進行した。

しかし冷戦崩壊以後、世界各地で民族紛争が頻発するようになった。紛争が相次いだ旧ユーゴスラビアではNATO軍が人道的介入を試み、また国連は平和執行部隊を派遣したが、対応の遅れなどでじゅうぶんな成果を得ることはできなかった。

①戦火を交えない戦争という意味で「冷たい戦争」と呼ばれたことに由来する。

②ソ連がアメリカの近くにあるキューバに核ミサイル基地を建設しようとした事件。アメリカはミサイル配備を中止させるため強い態度に出たため、米ソ核戦争の危機となった。

③ドイツは戦後東西に分裂したが、東ドイツの領域にあった首都ベルリンもまた東西に分裂し、戦後ソ連が東西の境界線上に壁を建設していた。これを「ベルリンの壁」と呼んだ。

コメント [n1]: 第一学習社「新政治経済」p 42

コメント [Tt2]: 2007年度教科書『現代社会』（東書・現社 001）、p167

コメント [Tt3]: 2007年度教科書『現代社会』（東書・現社 001）、p167

コメント [Tt4]: 2007年度教科書『現代社会』（東書・現社 001）、p167